

## 第 17 回哲学プラクティス国際会議参加報告

### —— 哲学プラクティショナーのつながりについて ——

Report on 16th International Conference on Philosophical Practice: Dear colleagues, we could be more collaborative, we all know that. Go on now. Keep it up.

桂ノ口 結衣

#### 1 ICPP 参加報告：哲学プラクティショナーの国際的協働

2021 年 7 月 27 日から 30 日にかけてオンライン開催された哲学プラクティス国際会議 (International Conference on Philosophical Practice、以下 ICPP) 第 16 回大会 (開催国ロシア) ①に参加した。哲学プラクティスは国際的にも国内的にも様々な文脈や目的をもっており、何か一つの理想像を掲げられるものではないが、ひとと直接に関わる営みである以上、相手と自分双方の安全や安心に寄与するようなある種の“哲学プラクティショナーの熟達”は文脈や目的に関わらず探求されるべきと筆者は考えており、そうした熟達を支える可能性のあるものとして“哲学プラクティショナーのつながり”に関心を抱いている。本稿では、筆者が ICPP で参加したセッションのうち、哲学プラクティショナーの国際的協働に関する 3 報告を取り上げる。これらは、日本の哲学対話関係者らも今後参画しうるそれ自体重要な動きであると同時に、“哲学プラクティショナーのつながり”について考える手がかりをくれるものだ。

##### 1-1. 哲学プラクティス関連データベース作成プロジェクト

アルゼンチンの David Sumiacher 氏が進行をつとめたセッションでは、哲学プラクティスに関するデータベース書籍が刊行間近 (2021 年 9 月現在) であると報告された。これは、おもにイberoアメリカで行われてきた女性、受刑者、子ども、先住民など「社会的排除リスクにさらされている人たちとの哲学 (philosophy with vulnerable people at social risk)」のプロジェクトメンバーらを中心とした動きである。著書はスペイン語で書かれ、タイトルは *Filosofía en movimiento* (英訳すると *Philosophy in movement: State and situation of philosophical practices in the world*) である。世界中の、「哲学プラクティス」というものの内部で働いていたり本を書いたりしている人たち「全員」を重視しながらその諸分野を調査し、技法をつくりだしたり発見したりすること、世界各地の仲間たちを刺激することを目的としている。もちろん常に新たな人、新たな大学、新たな組織が参入するため本当に「全員」が可能であるわけではないが、実践歴が長かったり実践内容に定評があったりする人たちだけ取り上げるのではなく、新しい人たちも含めできるだけ「全員」を網羅できるよう努められた。また書籍は、「子どものための哲学」、「哲学カウンセリング」、「哲学教育学」、「先住民族コミュニティとの哲学」、「組織との哲学」、「哲学プラクティスに関する書籍および雑誌」、「哲学プラクティスを行う大学」という各章で構成されており、「先住民族コミュニティとの哲学」という現時点では哲学プラクティスの中でもメジャーだとは言いつらい分野にも章を独立させている点は注目に値する。こうした姿勢は、哲学プラクティス内にも排除リスクにさ

らされている人たちがいるという認識から来ているのではないかと筆者は感じる。なお、このデータベース書籍をつくるため、13カ国20名の執筆者らが毎月会合をもち、各章について話し合うだけでなくさまざまなアイデアを交換しあい、またいくつかのコミュニティリサーチを共に行ってきたという。

### 1-2. 哲学プラクティショナー向け Web サイト作成

哲学プラクティショナーのための Web サイト作成が主題のセッションでは、2つの Web サイトが紹介された。1つは Lou Marinoff 氏による ICPP のアーカイブサイト、もう1つは The Philosophical Practice Hub Project によるオープンプラットフォームである。

Marinoff 氏は、何か一つのイデオロギーや規約やヒエラルキーによってではなく、多様な哲学プラクティショナーたちが2～3年に一度会することによって存続してきた「この (ICPP という) コミュニティの骨格だけでも辿れるように」と、これまでの各大会のアーカイブサイトを作った<sup>(2)</sup>。1994年の第一回大会からコミュニティをつくりケアしてきたベテランが、その歴史を自らの権威にするのではなく、「あなたたちみんなとのワンダフルジャーニー」を共有するために時間をかけてくれた、という事実に筆者は素朴に感動した。

The Philosophical Practice Hub Project は、2020年 ICPP 内のワークショップ「Creating an International Network on Philosophical Practice」から始まり、今年すでにデモサイト<sup>(3)</sup>を紹介するほど具体的に進展している。多様な哲学実践者の「協働のためのオープンプラットフォーム」には何が必要かを対話し考えながら制作中で、少なくとも情報収集できるように、そして可能であれば研究やワークショップ、定期的な会合などを一緒に行えるようにということで、実践者所在地マップ、実践種別（たとえば P4C、個人カウンセリング）の主要トピック解説・百科事典ページ、研究グループ募集ページ、哲学プラクティスに関する学会・協会や教育機関のリストなどが含まれる予定だ。

### 1-3. アカデミア変革プロジェクトとしての執筆募集

雑誌 *HASER* の紹介および投稿募集セッションでは、編集長 Pepe Barrientos-Rastrojo 氏が論文を募集すると共に、氏の考える論文投稿の意義を述べた。一つに、雑誌とは、実践での経験やそれが根ざしている理論について、よいピアレビューができる場でもあるということ。また、アカデミックキャリアを進めていく上でいくらか足しになること（たとえばこうした会議に参加するにも費用、ひいては何らかの職業的地位が必要だと認識していること）。さらに、一緒に活動したことのある人達が、それぞれの国や地域でどのような活動をしているか知り合えること。そして、だからこそ哲学プラクティスの雑誌はもっと増えるべきだと主張した。聴衆の一人が「哲学プラクティスが生き方に関わる営みだとすれば、それとアカデミックな世界はどう関係があるのだろうか？」と問うと、「昨今の大学は「たくさん哲学する哲学者」を買い、そこから排除している人々--たとえば子どもや、刑務所にいる人たち--の重要な言説は考えることがないままだ。私達がアカデミアにいて「哲学とは何か」を拡張できる」と答えていた。

また、Lexington シリーズから出版予定の“アカデミア向け”哲学プラクティス入門書を編集する Lydia Amir 氏も、同セッションの中で「アカデミアも変えていきたいから」とこの本を作る理由を述べながら、執筆してみたい人をオープンに募っていた。

## 2 小考：哲学プラクティショナーのつながりと呼びかけ

一人ひとり固有の文脈で独自の実践を行うことが多い哲学プラクティショナーの孤独は根本的なもので、なくすことはできず、各自が引き受けざるをえない。だとしても、各自にとって付き合いやすい孤独になるよう、変形させたり位置を調整したりする作業は可能なはずだ。同時代や過去の（時間軸で言えば横縦に存在する）実践者たちを知り、その網の目の中に自分を位置づけ直すことは、実践者が孤独を抱え直す作業になり得ると筆者は思う。本節ではこうした可能性についてもう少し見ておきたい。具体的には、前節で紹介した各セッションを元に、つながりを可視化する際の“地”となるべきものや、歴史とのつながりの重要性や、あいまいなつながりの意義について小考する。

### 2-1. つながりの“地”

哲学プラクティショナーが他の実践者たちを知ることに意義があるならば、実践や実践者の情報を、単に（たとえば AI 等を使って）多く可視化すればするほどよいのだろうか。いや、可視化する営み自体に、他の実践・実践者への関心や敬意や信頼が必要だろう。

たとえば 1-1 で述べた哲学プラクティス関連データベース作成プロジェクトの報告では、「完成に時間がかかった代わりに、多くの仲間たち、グループ、機関を知ることができた」と笑顔で語る姿や、書籍には亡くなった哲学プラクティショナーたちの追悼ページもあるという話や、「この本は今から 100 万冊売れるわけけど」と冗談を交えつつ「何が哲学プラクティス／プラクティショナーにとってよいことかという文脈で、売上金を何に使っていくか考えていくのも大事だ」という参加者との問題共有があった。こうした態度からは、他の実践者や実践に対する関心や敬意、自分たちが大切にしようとしていることを共有できるはずだという信頼を受け取ることができる。こうした態度が“地”として見えるからこそ、情報が、受け手にとって単に利用価値の高いデータであることを超え、その中に自身を位置づけられるようなつながりとして立ち現れてくるのだと筆者は思う。そうした“地”をいかに耕し開いていくか。これは、国内の“哲学プラクティス学”に関わる私たちも探求しつづけるべき、大切な問いの一つだろう。

### 2-2. 歴史とのつながり

同時代的なものとは比べ、過去の実践者や実践はすでに存在しない場合もあり、交流や協働といった直接的なつながりにはなりづらいかもしれない。けれども、自分の実践とこれまでの哲学プラクティス、ひいては哲学の歴史との間につながりを見出すことは大切だ。

哲学プラクティスの名にある“哲学”は、たとえばジェンダーや人種等、特定の偏りを以て人々やものごとを“哲学ではない”“哲学者ではない”と切り捨ててきた歴史ももつ。そうした“哲学”の歴史の端で行われる営みであるという自覚をもって行われてきた哲学プラクティス（たとえばフェミニスト哲学カウンセリングや社会的リスクのある人たちとの哲学など）についての学びは、自分の実践にどのようなバリアがあるか、自分がどのような色眼鏡をかけているかといった重要な問いを照らし出してくれるだろう。

また歴史研究者の安岡（2021）は

[.....] 自分がなぜ、どのようにして、「いま、ここ」にいるのか。それを歴史と考えれば、誰もが、自分自身の歴史を持つことになります。しかし、持っているにもかかわらず、それを理解できない状況があります。ある種の「孤立」といってもいいかもしれません。この認識を起点として、歴史をもつ存在、すなわち時の経過とともに生じてきたさまざまなつながりのなかに存在するものとして自分を理解できることを権利と捉え [.....] それぞれの持つ自分自身の世界 (one's own world) と歴史 (history) を架橋する力が、学問としての歴史学にはあると思っています。(4)

と述べている。哲学プラクティスの文脈でも、「時の経過とともに生じてきたさまざまなつながりのなかに存在するものとして自分を理解できること」を、“哲学プラクティショナー自身の歴史を持つ権利”として筆者は捉えたい。たとえば「いま、ここ」にある課題を、その実践に固有の文脈でだけ読み解くのではなく、哲学プラクティスや哲学という全体の中の一事象として位置づけ直す権利があるのだ、というふうに。

1-2で述べたICPPアーカイブサイトなどをおし、哲学プラクティスの歴史につながることは、死角や偏向に目を瞑らず進む道を知る、という意味で哲学プラクティショナーにとって重要な作業だと筆者は思う。また、哲学プラクティスの“歴史をつづる権利”が、たとえば実践者の特定の属性・立場や実践のローカリティによって侵害されていないかにも注意が向け続けられるべきであろう。

### 2-3. 呼びかけから始まる

哲学プラクティショナーにとって、他の実践や実践者とのつながりは同時代的なものであれ歴史的なものであれ重要であり、そのために研究者が貢献できることは多くあるとまずは自覚したい。一方で、ただどこか深い部分で自分はひとりではないと知ってられるような、もっとぼんやりとした意味でもつながりは重要なのだろうと筆者は思う。

“Hi, colleagues,...”。筆者の参加したICPP(2021)のプログラムは全て、初参加の筆者にも名だたるベテランにも等しくかけられる、この呼びかけから始まるものだった。それは英語の慣用表現であると分かっている、筆者をとっても勇気づけた。

「呼びかけ」について、マルディネを引きつつ精神科訪問看護師の経験記述を試みる村上(2021)<sup>(5)</sup>は、

マルディネは何度もくりかえし、道に迷った人が空虚に向かって「おおい」と呼びかける場面を挙げる。...いまだ存在しない<そこ>というポイントを砂漠の中に穿って呼びかけることで、<そこ>を基点として世界全体が意味のある居住可能なものへと変容するかもしれない... (pp.264-265)

と述べている。

存在すると予め分かっているのではない宛先に、それでも届き、そこから共に変容していく可能性を信じて発する「呼びかけ」。筆者には、“Hi, colleagues”もそうした1つの呼びかけであるように感じられる。

また1-3で見たような実践者に対する雑誌への投稿募集も、こうした意味での「呼び

かけ」になり得る、というかそうあるべきだ。たとえば“ピアレビューの輪に入る”ということ一つとっても、文を書き雑誌に投稿する意義や価値は決して研究者だけが独占すべきものでない。この呼びかけに対してどのような希望や懐疑や警戒を返すかは、個々の実践者が今いる地点やこれまで見てきた景色によって異なるだろう。しかし今問われるべきは、時間をとってその意義や方向を共有しようと試みなければ（たとえば単に募集要項を Web サイトに貼っておくだけでは）、そもそも実践者に対する呼びかけにすらなっていないのではないか、ということだ。日本の哲学プラクティス研究者は実践者に対して何かを呼びかけることができてきたのか？ また、実践者からの呼びかけに答えられてきたのか？ この振り返りは、研究者と実践者が共に哲学プラクティスの可能性を育てていくためにまず行われるべき作業ではないだろうか。

#### 2-4. まとめ

日本の哲学プラクティスの文脈でしばしば浮上する「誰を colleagues と見なすのか」という問いは、きわめて真っ当で、議論が続けられるべきものだと筆者は思っている。けれども一方、今回 ICPP に参加して感じた様々なつながりは、相手が誰であるか検め、境界設定することで“予め colleagues と分かる”人たちだけのものでは決してなかったし、その開放性にこそ哲学プラクティショナーにとって重要なつながりのコアがあるのではないかと感じている。つながりの境界設定と開放性は、おそらく矛盾するものでなく、哲学プラクティスの実践・実践者にとって両輪的にどちらも必要なのだろう。

哲学プラクティショナーらが生きたり要したりしているつながりは、必ずしも当人らに最もよく見えるわけでない。だから、哲学プラクティス研究—調査や分析や言語化の機会やちから—を、そのつながりを描き出すために使っていくことは今後も重要だろう。そうした研究が、おずおずとでも、失敗を経ても、何度でも、多様な哲学プラクティショナーたちへの Hi, colleagues, という呼びかけと共に始まることを私は願っている。

#### 【謝辞】

本報告は、「第 13 回未来を強くする子育てプロジェクト」の助成を受けた調査・研究に基づいている。

#### 【註】

- (1) ICPP は基本的に隔年開催されており、本来第 16 回大会は 2020 年サンクトペテルブルグにて開かれる予定だったが、Covid-19 の影響を受け、2020 年に規模縮小版、2021 年に本大会を開催という運びになった。こうした開催経緯については水谷みつる・神戸和佳子・安本志帆「パンデミック下の国際哲学プラクティス学会：第 16 回 ICPP オンライン大会参加報告」、『みんなで考えよう』緊急特集 2020 年 9 月号：72-89、また 2020 年のプログラムについては S.V. Borisov(ed.) *Philosophical practice for self-knowledge by means of intellectual creativity: collection of writings of the online conference on philosophical practice (July 28-31, 2020)* を参照のこと。なお今年の大会については YouTube に映像アーカイブもある。
- (2) International Conference on Philosophical Practice <https://icpp.site/> (最終閲覧 2021.11.11)
- (3) PP Hub <https://aleksababic59.wixsite.com/site-1> (最終閲覧 2021.11.11)
- (4) 安岡健一「大阪大学社会ソリューションイニシアティブ (SSI) マンスリー・トピックス：「歴

史をつづる権利」のために」、2021. <https://www.ssi.osaka-u.ac.jp/activity/topics/yasuoka/> (最終  
閲覧 2021.11.11)

(5) 村上靖彦『交わらないリズム：出会いとすれ違いの現象学』青土社、2021.